



壁をつくる

仙台市立幸町中学校 2年

鈴木 心晴

仙台の東の端、若林区荒浜海岸。私がここで「壁」づくりに参加して今年で六年になる。

十年前、東日本大震災の大津波で、この海岸沿いに見渡す限り続いていた松林はそつくりなぎ倒され、壊滅的な被害を受けた。

震災後、仙台の沿岸部で取り組みが進められてきた多重防護。海から内陸に向かい、海岸堤防、防潮林、そして緊急避難場所を兼ねた避難の丘、さらにはかさ上げされた高速道路と、四つの壁をつくることにより、津波からの減災・防災を目指すものだ。私が携わるのは、その二つ目の壁づくり。失われた自然を取り戻し、津波に負けない防潮林を再生するための植樹と育樹の活動だ。

春には苗木を植樹する。夏には周りの雑草を取り、秋には藁で冬支度。ドングリを拾ってプランターに蒔き、育苗にも挑戦している。

を奮い立たせる。これまでここに植樹された木は十万本を超えた。それでもまだ、失われた林のほんの一部だ。

震災の時四歳だった私が覚えているのは、大きな揺れだけ。その後に何が起きたのかを理解したのはずっと後になつてからだ。あの日命を守つてもらい、多くの人に支えられてきたからこそ今の私がいる。今度は私が、震災で傷ついたこの地域の未来のために、できることを見つけて感謝をお返しする番だ。

初めて植えた膝の高さの苗木は今、私の身長をとうに追い抜いて若い林になつた。いつか大地にがっしり根を張つて、命と生活を守る強くて高い壁になつたら本当に嬉しい。

元の場所いっぱいに再び緑が輝くその日まで、これからも壁づくりに参加し続けていきたい。一人の力は小さくとも、集まれば大きな力となり、頼もしい未来につながっていくはずだから。

(審査評) 主題に沿い簡潔で、文章が丁寧。作者が覚える大きな揺れは、美しい松並木を壊滅的に破壊。「あの日守られた命は多くの人に支えられ、今のがいる」と津波からの減災・防災をめざし、防災林の再生に。夏や冬とともに過ごし「命と生活を守る強くて高い壁になつたら本当に嬉しい。」愛情いっぱいに世話をし、活動を通して大地にがっしり根を張り、力づよく生きていく姿が頼もしい未来につながる。